後継者の覚悟

1

「うーん、これはどうしたものか」
まとめられた経理書類を見て、清毅は愕然（がくぜん）とした。
「正直、財政は火の車だ…」
母に続いて妹も急逝するという学園での事態の急変に、安城を離れていた清毅は、急遽仕事を整理して安城に帰り、学園の運営に携わることになった。九月から法人本部本部長として経営に当たることになり、これまでの経理実態について調べたが、その意外な実情に唖然（あぜん）としたのだった。
―母は、ひたすら地域の要請を容れて、学園の財政も顧みず、借財をしながら学園を大きくしてきた。地域の教育には、それはそれで認められることであろう。しかし、その進展があまりにも急で、財政的に考えると背伸びし過ぎた…。
母からは生前再三にわたって学園に戻ってくるようにとの連

寺部清毅理事長

絡を受けていたが、カムバックが遅すぎたことを痛感した。

財政不如意の原因は色々あった。

学園の収入を主として支えてきていた安城学園女子短期大学附属高等学校は、昭和三十九（一九六四）年度頃からベビーブームの波が去って生徒数が激減してきていたし、愛知女子大学、短期大学部幼児教育科、岡崎城西高等学校は新設まもないため、定員をどれだけ充たせるかが課題だった。安城学園女子短期大学と附属幼稚園は定員を充たしてはいたが、いずれも定員数が少ないため収入的にはあまり期待できない。財政的にはいわば下降線を辿っている。一方、ここ数年、連続して進められた事業の代金決済を山積みしており、学園財政はひっ迫の度を強めていたのだった。

創立者としてだいは大学設置の夢を果たした。そして、後継者にその発展を付託した。しかし、夢の代償は後継者に重くのしかかった。

清毅は、目の前に迫る現実に、まず収支改善のメスを入れた。

負債返済には、債権業者をそれぞれ訪問し、返済計画を示して支払い延期を頼んで回った。一方、収入源の拡大を図るために生徒募集に全力を傾けた。

2

立て直しに乗り出して一年、精力的な清毅の努力は程なく効果を現していった。

―一般の人が十年かかるところを、大体その三分の一くらいでやってきた…。

清毅には、もともとこうした自信・自負があった。かつて蒙古政府に勤めていた時、異例の昇進がもたらされたのもそれゆえのことだった。

なんとか経理面の整理がつき、金融機関の信用も得られることになった。

すると、さっそく次の改革のメスを入れた。

「再建は財政と教育にある…」

と考えていた清毅は、ここで財政以外の内部整理と将来展望について中期計画を策定した。

昭和四十二（一九六七）年十月、清毅は理事長に就任すると、直ちに五ヵ年計画による法人復興策を打ち出した。

昭和 43 年に開設された LL 教室

それは、意外にも積極的な〝攻めの計画〟であった。

計画に二つの柱を立てた。

第一の柱は、施設の拡充。短期大学と高校が同居している状態から早く離脱しなければならなかった。そのために安城市小堤町の安城学園女子短期大学と安城学園女子短期大学附属高等学校の校舎を増築する。同時に、岡崎市舳越町の校地に愛知女子大学の新校舎とともに安城学園女子短期大学校舎を建設する。これはあえて執った〝拡大戦略〟で、学園のイ

メージチェンジを図る起死回生策でもあった。

第二の柱は、教育課程の再編。それまでは官公立校の後追いであった教育課程を、学園独自のものに編成することだった。安城学園女子短期大学附属高等学校と岡崎城西高等学校の両校のカリキュラムは公立に準拠したもので、私学の独自性を示すような特色がなかった。そのため、私学としてのアイデンティティを示すための特色あるカリキュラムを編成する必要があった。

3

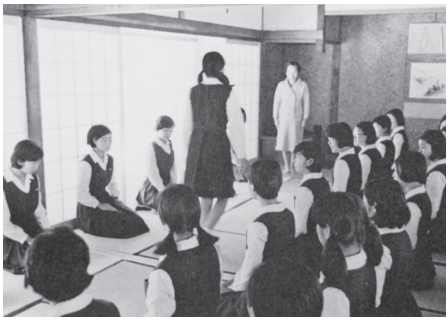
教育課程が整理統合され、特設科目が設定されていった。例えば、安城学園女子短期大学附属高等学校では新しい教育課程は昭和四十四（一九六九）年四月から実施されたが、同時に礼法教科書を自主編さんして発行したり、女性学・ＭＤ（教師と生徒、生徒と生徒が切磋琢磨する特別教育活動）などを含む全く新しい教育課程を導入（昭和五十六年四月）したりするなど〝進化〟を見せていくことになった。

大学では、特に家政学において先進国である米国の大学を視察してカリキュラムの研究に当たった。同時に研究職としての専門能力を高め、新しい大学の在り方を模索するために、一ヵ年の在外研修制度も発足させた。

＊

施設の整備拡充、教育課程の再編とともに、第三には、メンタルな面の強調を図ることだった。それは建学の精神の高揚だった。

清毅は、母亡きあと久しぶりに学園に戻ってその現状を知るにつけ、母を想うところが多かった。幼い時から見知っていた母は、朝は五時に起きて朝食の準備に始まり、昼間は授業、放課後は寄宿生の教育、そして夕食の準備・後片付け。食事が済んでからは、台所の隣の部屋で夜なべ。家族の衣服づくりに励んだ。薄暗い電燈の下で針を動かしている母の横顔は厳しく、りりしさを漂わしていた。そんな極めて多忙な教授・家事の中、更に自らの勉強をしていたのだから、超人的でもあった。


礼法授業。特設科目として昭和 44 年度から実施される（昭和 44 年）

しかし、そんな気丈な母も、清毅が公職追放を受けた時は、さすがに気落ちして涙を出して悔しがり、気弱さを垣間見せたこともあった。

しかし、その母が貫いたのは、逆境の人生にも屈せず、努力して知性と技術を培い、自立する女性として生きること、それを多くの人に教え伝えたこと、そしてそれを自ら実践してきたことだった。

教育に対しても、女性の自立という教育のためには、「諦めない」という強い意思を持っていた。

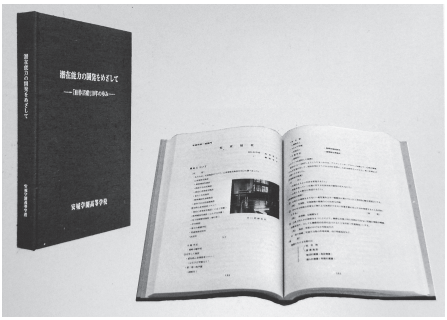
―その思いを遵奉し、世に広め、浸透を図ることが、自分の使

命、務めでもある…。

清毅は、ここに学園の教育指針として建学の精神を明確に標榜（ひょうぼう）することを定めたのだった。

4

建学の精神を象徴するものは何か―。それは、学園歌にもある〝永遠（とわ）の女（おみな）〟であり、安城学園教育の理想像である。それは、〝真心・努力・奉仕・感謝〟の四大精神の実践を通して、だいが唱導したように、潜在能力を可能性の限界までに開発し、家庭と社会に還元する女性である。



昭和50年から始めた創作活動10周年を記念して刊行された『潜在能力の開発をめざして』（昭和60年12月刊）

今それを建学の精神としてあらためて大きく、強く鼓吹（こすい）し、遵守していくこと、それが母の生き様を身近に深く脳裡に焼きつけている者としての務めだと、清毅は思ったのだった。

清毅は、建学の精神を学園のバックボーンにするためにその浸透を図った。

安城学園女子短期大学附属高等学校では、だい亡きあと、学園理事長の杉原博が学校長事務取扱いを兼務していたが、昭和四十二（一九六七）年十月、清毅が理事長とともに学校長に就

任した。新校長として新たな歩みを始めるに際して、清毅は、

「学園創立の原点に帰ろう」

と呼びかけた。

昭和四十三（一九六八）年三月には、杉原博学長に代わって、清毅が大学学長になった。

「学園設立者の意志である建学の精神を、特に教育の面でどう具現化していくか、地方の大学として地方文化にいかに寄与していくかについて努力したい」

寺部清毅学長は就任に当たり、こう語った。こうして入学式、卒業式、オリエンテーション等の学校行事や、さまざまな刊行物など機会あるごとに、建学の精神の鼓吹に努め、その周知徹底を図っていくことになった。

＊

清毅新理事長にとって、学園再構築の新たな計画は学園財政が窮迫しているさなかの苦難のスタートであったが、挑戦は着々と実を結んでいった。

5

清毅が新学長になってその一ヵ月後、昭和四十三（一九六八）年四月、大学の名称が変更された。「愛知女子大学」を「安城学園大学」と改称したのだった。これに伴い、愛知女子大学附属幼稚

昭和 44 年に完成した大学岡崎キャンパス東棟（左は北棟学生ホール）

園も安城学園大学附属幼稚園と名称変更された。

改称の背景には、県内に類似名称の短期大学があり、まぎらわしく独自性が薄れるということがあった。

しかしまた、〝女子〟という呼称を外したことは、「将来男子学生の受け入れも予想される」という、明日の学園運営に対する深謀遠慮が含まれてもいたのだった。

大学の名前も新たに、清新な気持ちで踏み出した学園は、計画を次々と実施に移していった。

安城学園大学で、昭和四十四（一九六九）年三月に食品加工室、講義室、研究室を含む三階建ての新校舎が落成したのを一段落として、安城で短期大学学舎と高校校舎、また岡崎で短期大学学舎、大学学舎が姿を現していった。いずれも鉄筋建であることはいうまでもなく、そのデラックスな外観は、学園のイメージアップをもたらすに十分だった。

こうして大学、短期大学の基盤が充実した暁（あかつき）に、計画は第二次へと進行する。

昭和四十七（一九七二）年十一月には、学園は六十周年を迎え、さまざまな記念行事が行われた。この年はまた、第二次五ヵ年計画が始動した年でもあった。

第二次計画は第一次計画の路線を継承して、施設面、カリキュラム面で更に進展を図った。

第一の柱は、安城学園女子短期大学附属高等学校および岡崎城西高等学校の社会的地位を高めること、第二の柱は大学、短期大学の整備充実であった。

第二の柱は第一次に続くもので、安城学園大学の校地の拡充、学舎（現在の南棟）の建設などとあいまって、長年懸案となっていた安城学園女子短期大学を安城から岡崎へ移転するほか、安城学園大学短期大学部の定員増に備えた移転もして、岡崎校地を大学、短期大学の集結地とする体制（現体制）を整えるものだった。

6

学園は第二次計画によって、昭和五十三（一九七八）年頃には一応の基盤整備を終え、更なる総合的学園としての発展拡充へと入っていく。その様は系列各校それぞれに華開くの感があった。

学園は、学園創立六十五周年を記念して、昭和五十二（一九七七）年に〝学園の顔〟ともいうべき本部管理棟を竣工した。

学園の核と目される大学では、学園創立六十周年を迎えた記念に昭和四十七（一九七二）年、図書館を増築するとともに、生活文化研究所（現ライフデザイン研究所）を開設。昭和五十（一八七五）年に第一回ヨーロッパ研修旅行を実施したのに続いて、昭和五十二（一九七七）年に

・家政学部に欧米文化コース新設

・南棟・管理棟竣工（岡崎キャンパス）

を行って、国際化志向を鮮明に打ち出した。

これらの中で、「安城学園大学生活文化研究所」は特に注目されるものだった。

安城学園大学のメイン学科である家政学においては、昭和四十七（一九七二）年前後から、家政学を生活の科学として再構築しようとする試みが始まり、家政学における総合科目への取り組みが強められた。一般教育科目に「一般教育総論」が設けられ、「家庭生活論」などの家政学特別講義も実施された。

その中、「生活文化研究所」は〝安城学園・家政学〟ともいうべきものの成立を目指す学内組織として位置づけされるものであった。その趣旨はこうだ。

「本研究所は、学園創設者寺部だいの基本的な教育理念である『人間の能力は計り知れない』『女性の潜在能力は無限である』『それは可能性の限界にまで開発することが出来る』を実現し、高度消費社会における家政学の領域を人間生活に関する総合科学として確立することを期している」

その標榜には大きく建学の理念に基づく研究機関であることが謳われていた。

こうして研究対象も多彩に、生活を対象とする総合的な、また自学独自のものとしての家政学の研究が本格化していったのであった。

昭和43年に完成した短期大学安城キャンパスの校舎

7

女子短期大学・大学短期大学部にあっては、昭和四十五（一九七〇）年に幼児教育科公開講座を開始し、斯界（しかい）に存在感を高めたが、昭和五十年代に入ると、改編の手を加えていった。

昭和五十（一九七五）年に被服科を服飾科に名称変更。昭和五十三（一九七八）年には桜井キャンパス・岡崎新キャンパスを竣工して、幼児教育科を桜井キャンパスへ、他の科を岡崎キャンパスへ移転した。さらに翌五十四（一九七九）年、短期大学の四科を統合。安城学園大学短期大学部を廃止し安城学園女子短期大学幼児教育科に。その幼児教育科の入学定員を昭和五十五（一九八〇）年に五十名から百名に増員と、改編を進めたのである。

安城学園女子短期大学附属高等学校においては、

・白百合寮を新築（昭和四十六年）

・本館・北館の東側に校舎増築および視聴覚教室を改造しアナライザーを設置（昭和五十二年）

グラウンドから見た岡崎城西高等学校の校舎（昭和 45 年）

・富山県栃折に「心のふれあい学校舎」を取得（昭和五十四年）

と施設を充実する一方、昭和四十六（一九七一）年、創作活動を試行（同五十年に本格実施）、同四十八（一九七三）年にはアメリカから初の留学生を受け入れ、五十四（一九七九）年にリーダーズキャンプを実施するなど、多様な教育体制がとられていった。

〝姉妹校〟である岡崎城西高等学校でも施設増強が進む。昭和四十五（一九七〇）年には校歌制定や夏山合宿を始めて、学校の〝絆〟を強める中、昭和五十一（一九七六）年に中央棟（昭和五十七年にさらに増築）、同五十四（一九七九）年には東棟を新築竣工して、校容を一新していった。

幼稚園関係においても、大きな進展があった。

昭和四十五（一九七〇）年、安城学園大学附属幼稚園が保育室を増築した。翌四十六（一九七一）年には安城学園女子短期大学附属幼稚園が新しい敷地に新築されて面目を一新する中、昭和五十（一九七五）年に桜井幼稚園（現愛知学泉大学附属桜井幼稚園）を新に開園した。

8

振り返れば、安城学園の幼稚園事業は戦前の流れを汲んで戦後昭和二十五（一九五〇）年に再興された。安城学園女子短期大学附属幼稚園を小堤町に開設したのだ。そして大学の開設にともなって、昭和四十一（一九六六）年に愛知女子大学附属幼稚園を栗ノ木町に開設。さらにいま昭和五十

（一九七五）年に桜井町に桜井幼稚園が開設され、その教育が地域に根づいた証としてここに三園を数えるまでに発展したのだった。

園長は学園創立者の寺部だいが兼任してきたが、昭和四十一（一九六六）年五月、逝去にともない、寺部芳子理事（清毅夫人）が後任となった。

三園を統括する芳子園長のもと、各幼稚園では以来、共通の教育理念に基づき、それぞれに教育方針を打ち出して、地域に密着した教育活動を繰り広げていった。

「豊かな心と潜在能力の開発にあります。『真心・努力・奉仕・感謝』の精神を教育の基本理念として、家庭に温かい心を、社会に新しい息吹を与えることのできる人間を育成します。」

三園共通の教育理念はこのように謳われた。

安城学園の幼稚園は、桜井幼稚園の発足前の二園時代から、

・幼稚園音楽リズムにピアニカ導入。安城学園女子短期大学附属幼稚園にミュージックラボ施設を設置（昭和四十七年）

・漢字保育を開始　（昭和四十七年）

・幼稚園保育内容言語の中に「俳句」を取り入れ（昭和四十九年）

など先進的な取り組みをしていたが、三園体制になると、その〝利〟を活かして合同活動も活発になった。昭和五十一（一九七六）年には安城市民会館で三園合同生活発表会を、次ぐ五十二（一九七七）年には安城学園女子短期大学附属高等学校グラウンドで三園合同大運動会を実施した。

施設も各園で温水プールが完成（昭和五十四～五十八年）するほか、カリキュラムも「バイリンガル教育」、『壁画ものがたり』の発刊、「習字」、「お菓子作り」などの取り入れ、そして昭和五十四（一九七九）年には保育に英語教育を導入するなど、充実の度を加えていった。